

【2月の気象】

2月は「雪解」「立春」など、冬から春に向かうことが伺える季語が多くあります。2月上旬は1月下旬から続く1年で一番寒い時期です。暦では節分(本年は2月3日)を迎え、翌日の立春の名のごとく春へと進み始める頃となります。月の後半になってくると日本の南岸を通過していく低気圧(南岸低気圧)の影響で大雪になることもあります。

また、低気圧が日本海を発達しながら通過すると、春一番が吹き、気温が上昇することもあります。

四国地方における春一番は以下を基本として総合的に判断しています。

- ① 期間は、立春から春分までの間。
- ② 低気圧が日本海付近にあって発達し、南寄りのやや強い風が吹く(最大風速:概ね10メートル以上)。
- ③ 最高気温が前日より高くなる。

「春一番」が吹いたあとは冬型の気圧配置となる場合が多く、一転して北から寒気が流れ込むため気温の寒暖差が大きくなり注意が必要です。

2月は、気温の変化(寒暖の差)が大きくなる月です。農作物の管理には、週間天気予報、1か月予報及び早期天候情報等を活用してください。

四国地方の春一番の発現日

年	月日
2023年	2月19日
2022年	-
2021年	2月20日
2020年	2月12日
2019年	2月19日

「-」は発現しなかった

【気象用語】「南岸低気圧による雪」について

松山で大雪になる要因として南岸低気圧によることが多く、松山における降雪の深さ日合計の多いほうからの1位から3位は南岸低気圧によるものです。

南岸低気圧というのは、四国沖を低気圧が東進または東北東進することを言います。南岸低気圧は季節によらず発生しますが、冬期の南岸低気圧は予報官泣かせの厄介者です。

なぜ、難しいかと言えば、低気圧の通るコース、発達の度合い、上空の寒気、地上付近の気温、湿度など、様々な要素が絡みあい、雪なのか雨なのか、判断が難しいからです。四国の南、概ね北緯30度から33度付近を低気圧が通過する場合に雪になると言われますが、四国に近すぎると雨になり、遠すぎると雨・雪が降らないということになります。また、図1の雨雪判定のイメージ図の通り、地上付近の気温が1℃違いや、同じ気温でも湿度の違いで雨か雪かの違いがでます。2021年1月12日に南岸低気圧により、久万で13cm、宇和では7cmの積雪となりました。松山では、降り始めはみぞれでしたが、その後は雨となりました。図2は、その時の松山の気温と湿度のグラフです。0時41分~1時17分までみぞれを観測し、その後は雨となりました。みぞれが降り始めた時の気温は4℃を超えていましたが、湿度は60数%と比較的乾燥していました。その後、湿度が上昇したことで雨に変わり、気温は下がりましたが、湿度が90%を超え雨のまま推移しました。

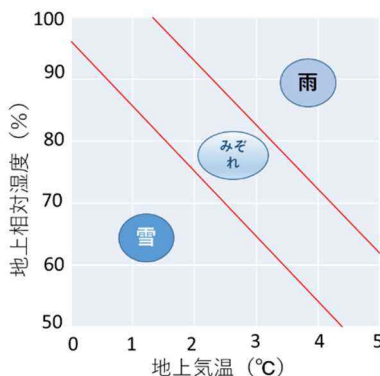


図1 雨雪判別イメージ図

(気象庁量の技術資料より作図)

赤線は、雪とみぞれ及び雨とみぞれの境界線

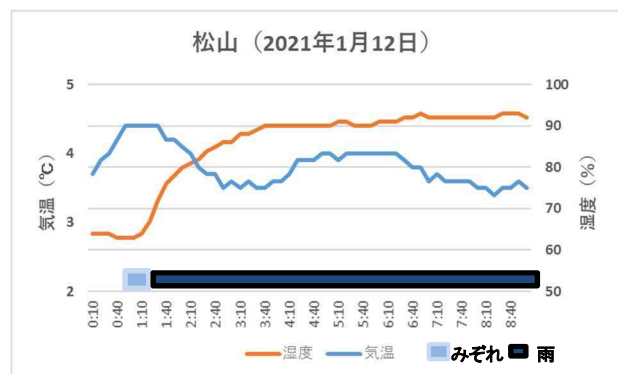


図2 気温、湿度の時系列